



致しませぬ。そうして、夜分、あなたの御心がずまったころ、私はここへ訪ねてきます。あなたの笑顔をみることができ、月の国のお友達や、親、姉妹と語るように打解けたお声をきくだけで、満足です。私を嘆かせて下さいませ。あなたの涙は、私のはらわたを、かきむしります。ただ、五日ではありませんか。この因縁は、もはや、仕方がないのです」

大納言はむなしく吠え、虚空をつかみ、せつなかつた。

几帳の蔭に悲しみの天女をやすませて、大納言は縁へでた。静かな月の光を仰いだ。はじめて彼は、この世に悲しみというものがあることを、沁々知った思いがした。

こうして、ただ、月光を仰ぐことが、説明しがたい悲しさと同じ思いになることは、いつたい、どうしたわけだろう。天女の身につけた清らかな香気が、たちまち月光の香気となって、彼の胎内をさしぬぎ、もし流れでる涙があれば、地上に落ちて珠玉となろうと彼は思った。ともすれば、あやしい思いにおちるのを、不思議な悲しさがなげ、泣きふしてしまいたい切なさに駆りたてられて、道を走った。

やがて、大納言は、息がきれ、はりさけそうな苦痛のうちに、天女のししいを思っていた。痺れるようなあやしさが、再び彼のすべてをさらった。官能は燃え、からだは狂気の焔であった。彼は走った。夢のうちに、森をくぐり、谷を越えた。京の住居へ辿りついて、くずれるように、うちふした。

致しませぬ。そうして、夜分、あなたの御心がしずまったころ、私はここへ訪ねてきます。あなたの笑顔をみることができ、月の国のお友達や、親、姉妹と語るように打解けたお声をきくだけで満足です。私を嘆かせて下さいませぬ。あなたの涙は、私のはらわたを、かきむしります。ただ、五日ではありませんか。この因縁は、もはや、仕方がないのです」

大納言はむなしく吠え、虚空をつかみ、せつなかつた。

几帳の蔭に悲しみの天女をやすませて、大納言は縁へでた。静かな月の光を仰いだ。はじめて彼は、この世に悲しみというものがあることを、沁々知った思いがした。

こうして、ただ、月光を仰ぐことが、説明しがたい悲しさと同じ思いになることは、いったい、どうしたわけだろう。天女の身につけた清らかな香気が、たちまち月光の香気となって、彼の胎内をさしぬぎ、もし流れでる涙があれば、地上に落ちて珠玉となろうと彼は思った。ともすれば、あやしい思いにおちるのを、不思議な悲しさがながれ、泣きふしてしまいたい切なさに駆りたてられて、道を走った。

やがて、大納言は、息がきれ、はりさけそうな苦痛のうちに、天女のししいいを思っていた。痺れるようなあやしさが、再び彼のすべてをさらった。官能は燃え、からだは狂気の焔であった。彼は走った。夢のうちに、森をくぐり、谷を越えた。京の住居へ辿りついて、くずれるように、うちふした。

致しませぬ。そうして、夜分、あなたの御心がしずまったころ、私はここへ訪ねてきます。あなたの笑顔をみることができ、月の国のお友達や、親、姉妹と語るように打解けたお声をきくだけで、満足です。私を嘆かせて下さいますな。あなたの涙は、私のはらわたをかきむしります。ただ、五日ではありませんか。この因縁は、もはや、仕方がないので

す。
大納言はむなしく吠え、虚空をつかみ、せつなかつた。

几帳の蔭に悲しみの天女をやすませて、大納言は縁へでた。静かな月の光を仰いだ。はじめて彼は、この世に悲しみというもののあることを、沁々知った思いがした。

こうして、ただ、月光を仰ぐことが、説明しがたい悲しさと同じ思いになることは、いったい、どうしたわけだろう。天女の身に

つけた清らかな香気が、たちまち月光の香気となつて、彼の胎内をさしぬき、もし流れてる涙があれば、地上に落ちて珠玉となろうと彼は思った。ともすれば、あやしい思いにおちるのを、不思議な悲しさがながれ、泣きふしてしまいたい切なさに駆りたてられて、道を走つた。

やがて、大納言は、息がきれ、はりさけそうな苦痛のうちに、天女のししあいを思つていた。痺れるようなあやしさが、再び彼のすべてをさらつた。官能は燃え、からだは狂気の焰であつた。彼は走つた。夢のうちに、森をくぐり、谷を越えた。京の住居へ辿りついて、くずれるように、うちふした。

翌る日。大納言は思案にかきくれ、うちもだえた。夜明けは、彼の心をしずめるために訪れはせず、恋と、不安と、たくらみと、野獣の血潮をもたらし、訪れていた。

致しませぬ。そうして、夜分、あなたの御心がしずまったころ、私はここへ訪ねてきます。あなたの笑顔をみることができ、月の国のお友達や、親、姉妹と語るように打解けたお声をきくだけで、満足です。私を嘆かせて下さいますな。あなたの涙は、私のはらわたをかきむしります。ただ、五日ではありませんか。この因縁は、もはや、仕方がないので

す。
大納言はむなしく吠え、虚空をつかみ、せつなかつた。

几帳の蔭に悲しみの天女をやすませて、大納言は縁へでた。静かな月の光を仰いだ。はじめて彼は、この世に悲しみというもののあることを、沁々知った思いがした。

こうして、ただ、月光を仰ぐことが、説明しがたい悲しさと同じ思いになることは、いつたい、どうしたわけだろう。天女の身に

つけた清らかな香気が、たちまち月光の香気となつて、彼の胎内をさしぬき、もし流れてる涙があれば、地上に落ちて珠玉となろうと彼は思った。ともすれば、あやしい思いにおちるのを、不思議な悲しさがながれ、泣きふしてしまいたい切なさに駆りたてられて、道を走った。

やがて、大納言は、息がきれ、はりさけそうな苦痛のうちに、天女のししあいを思っていた。痺れるようなあやしさが、再び彼のすべてをさらった。官能は燃え、からだは狂気の焰であつた。彼は走った。夢のうちに、森をくぐり、谷を越えた。京の住居へ辿りついて、くずれるように、うちふした。

翌る日。大納言は思案にかきくれ、うちもだえた。夜明けは、彼の心をしずめるために訪れはせず、恋と、不安と、たくらみと、野獣の血潮をもたらして、訪れていた。

出ていった。新しい住居は、一本のブナの根の間から掘られはじめられていた。それは、まだ、入り口が一つしかない小さなでこぼこした洞穴だった。三匹はそれをひろげはじめた。根の間の土を掘り、森の中に出られる二本目の通路をつくるため上に向けてトンネルをつくりはじめた。しばらくすると、ストローベリーは掘るのをやめ、根の間をあちこち動きまわり、においをかいだり、根をかんだり、前足で土をせっせとかき出しはじめた。ヘイズルは、彼がくたびれてしまったので、いそがしくはたらくふりをしながら休んで

出ていった。新しい住居は、一本のブナの根の間から掘られはじめられていた。それは、まだ、入り口が一つしかない小さなでこぼこした洞穴だった。三匹はそれをひろげはじめた。根の間の土を掘り、森の中に出られる二本目の通路をつくるため上に向けてトンネルをつくりはじめた。しばらくすると、ストローベリーは掘るのをやめ、根の間をあちこち動きまわり、においをかいだり、根をかんだり、前足で土をせっせとかき出しはじめた。ヘイズルは、彼がくたびれてしまったので、いそがしくはたらくふりをしながら休んで

十七 白い蛇

王さまの食卓には、毎日昼になると蓋をかぶせた深皿が置かれました。誰もいなくなってから、王さまはひとりきりでその皿から食べました。それで、それがどんな料理なのか知っている者は、国じゅうにひとりもいませんでした。召し使いのひとりだけが、その深皿の中に何が入っているのかわかりたくなくて、王さまに深皿を下げるように命じられたとき、どうにもそれ以上がまんできなくなり、皿を自分の部屋に持っていくと、蓋を開けました。開けてみると、中には白い蛇が入っていて、その蛇を見るとどうしても食べたかったので、一切れ切り取って食べてしまいました。ところが、蛇の肉が唇に触れたとたん、動物の言葉がわかるようになりました。窓の外でさえずり合っている鳥たちの話も、聞くことができるようになりました。

その日のこと、お妃がすばらしい指輪をひとつなくしてしまいました。疑いがこの召し使いにかけられました。もし朝までに盗人を見つけ出せなかったら、召し使いを犯人として処罰する、と王さまは言いました。召し使いは悲しくなって、城の中庭へ下りていきました。すると水辺に数羽の鴨が休んでいました。そして鴨たちを見てみると、その中の一羽が話すのが聞こえました。「ああ、なんて胃袋が重たいんだろう。お妃さまのなくなった指輪を食べてしまったんだ」。召し使いはその鴨をつかまえると、料理人のところへ持っていきましました。「こいつをさばいておくれ。

十七 白い蛇

王さまの食卓には、毎日昼になると蓋をかぶせた深皿が置かれました。誰もいなくなってから、王さまはひとりきりでその皿から食べました。それで、それがどんな料理なのか知っている者は、国じゅうにひとりもいませんでした。召し使いのひとりも、その深皿の中に何が入っているのかわりたくなくて、王さまに深皿を下げるように命じられたとき、どうにもそれ以上がまんできなくなり、皿を自分の部屋に持っていくと、蓋を開けました。開けてみると、中には白い蛇が入っていて、その蛇を見るとどうしても食べたかったので、一切れ切り取って食べてしまいました。ところが、蛇の肉が唇に触れたとたん、動物の言葉がわかるようになりました。窓の外でさえずり合っている鳥たちの話も、聞くことができるようになりました。

その日のこと、お妃がすばらしい指輪をひとつなくしてしまいました。疑いがこの召し使いにかけられました。もし朝までに盗人を見つけ出せなかったら、召し使いを犯人として処罰すると王さまは言いました。召し使いは悲しくなって、城の中庭へ下りていきました。すると水辺に数羽の鴨が休んでいました。そして鴨たちを見てみると、その中の一羽が話すのが聞こえました。「ああ、なんて胃袋が重たいんだろう。お妃さまのなくなった指輪を食べてしまったんだ」。召し使いはその鴨をつかまえると、料理人のところへ持っていきました。「こいつをさばいておくれ。

十七 白い蛇

王さまの食卓には、毎日昼になると蓋をかぶせた深皿が置かれました。誰もいなくなってから、王さまはひとりきりでその皿から食べました。それで、それがどんな料理なのか知っている者は、国じゅうにひとりもいませんでした。召し使いのひとり、その深皿の中に何が入っているのかわかりたくなくて、王さまに深皿を下げるように命じられたとき、どうにもそれ以上がまんできなくなり、皿を自分の部屋に持っていくと、蓋を開けました。開けてみると、中には白い蛇が入っていて、その蛇を見るとどうしても食べたかったので、一切れ切り取って食べてしまいました。ところが、蛇の肉が唇に触れたとたん、動物の言葉がわかるようになりました。窓の外でさえずり合っている鳥たちの話も、聞くことができるようになりました。

その日のこと、お妃がすばらしい指輪をひとつなくしてしまいました。疑いがこの召し使いにかけられました。もし朝までに盗人を見つけ出せなかったら、召し使いを犯人として処罰する、と王さまは言いました。召し使いは悲しくなって、城の中庭へ下りていきました。すると水辺に数羽の鴨が休んでいました。そして鴨たちを見てみると、その中の一羽が話すのが聞こえました。「ああ、なんて胃袋が重たいんだろう。お妃さまのなくなった指輪を食べてしまったんだ」。召し使いはその鴨をつかまえると、料理人のところへ持っていきましました。「こいつをさばいておくれ。

十七 白い蛇

王さまの食卓には、毎日昼になると蓋をかぶせた深皿が置かれました。誰もいなくなつてから、王さまはひとりきりでその皿から食べました。それで、それがどんな料理なのか知っている者は、国じゅうにひとりもいませんでした。召し使いのひとりが、その深皿の中に何が入っているのか知りたくなつて、王さまに深皿を下げるように命じられたとき、どうにもそれ以上がまんできなくなり、皿を自分の部屋に持っていくと、蓋を開けました。開けてみると、中には白い蛇が入っていて、その蛇を見るとどうしても食べたくないので、一切れ切り取って食べてしまいました。ところが、蛇の肉が唇に触れたとたん、動物の言葉がわかるようになりました。窓の外でさえすり合っている鳥たちの話も、聞くことができるようになりました。

その日のこと、お妃がすばらしい指輪をひとつなくしてしまいました。疑いがこの召し使いにかけられました。もし朝までに盗人を見つけ出せなかったら、召し使いを犯人として処罰すると王さまは言いました。召し使いは悲しくなつて、城の中庭へ下りていきました。すると水辺に数羽の鴨が休んでいました。そして鴨たちを見ると、その中の一羽が話すのが聞こえました。「ああ、なんて胃袋が重たいんだろう。お妃さまのなくした指輪を食べてしまったんだ」。召し使いはその鴨をつかまえると、料理人のところへ持っていきました。「こいつをさばいておく

着を着た猫背の男だ。靴ははいていず、二人がいま聞いたのは、この男のはだしの音だった。日に焼けた濃い髪の毛が、きたならしく、もつれあっている。あおじろい目は鋭く光り、短い、やわらかな顎ひげは、うすよくれた金色だ。

「あいつ、よっぱどの変わり者にちげえねえ、まったくの話しが」。男は言った。

「お前さん、なんの用だね?」。女は言った。仕事の男は答えなかった。傍らを通りしなに、彼はポパイのほうに、ひそやかな、同時に抜けめない視線をちらと投げたがそれは、冗談を聞いたらすぐに笑い出しそうなのう機会を待ちかまえているといったふうだった。彼は足をひきずりひきずり、熊のような足どりで台所を横切ると、二人の姿がはっきり見えているところでありながら、なおも、抜けめない、陽気なうちにも人目を忍ぶような様子で、釘づけにしない床板を一枚とりのけ、一ガロン入りの壺を取り出した。ポパイは両方の人差し指をチヨッキに突っ込み、煙草の煙の渦を顔から立ちのぼらせながら（彼は一度も手をふれずに煙草を根元まで吸っていた）、その男のやることを眺めていた。その表情は荒

荒しく、あるいは悪意に充ちていると言ってもいい。仕事の男が、壺を横腹の下に不器用におしかくしながら、一種油断のないおどおどした様子で台所の床をもときたほうへ戻っていくのを、ポパイは物思いに耽ってでもない、笑う機会を待ちかまえているような表情をしながら、部屋から出てしまつてしまつて、ポパイから目を離さなかった。再び、ヴェランダをゆく男の素足の音が聞えた。

「大丈夫つてことよ」。ポパイは言った。「ルービー・ラマーが頓馬や薄馬鹿鹿野郎のために料理をしてやつてるなんてこたあ、マニユエル通りの連中には話しゃしねえよ」

「このろくでなし」。女は言った。「このろくでなしめが」

二

女が浅い大皿に肉を盛って食堂に入ってきたとき、ポパイと、台所から壺を取り出してきた男と、見知らぬ男の三人は、荒削りの厚板三枚を二つのX字形の台に釘づ

着を着た猫背の男だ。靴ははいていず、二人がいま聞いたのは、この男のはだしの音だった。日に焼けた濃い髪の毛が、きたならしく、もつれあっている。あおじろい目は鋭く光り、短い、やわらかな顎ひげは、うすよれた金色だ。

「あいつ、よっぱどの変わり者にちげえねえ、まったくの話しが」。男は言った。

「お前さん、なんの用だね?」。女は言った。仕事の男は答えなかった。傍らを通りしなに、彼はポパイのほうに、ひそやかな、同時に抜けめない視線をちらと投げたがそれは、冗談を聞いたらすぐに笑い出しそうなのう機会を待ちかまえているといったふうだった。彼は足をひきずりひきずり、熊のような足どりで台所を横切ると、二人の姿がはっきり見えているところでありながら、なおも、抜けめない、陽気なうちにも人目を忍ぶような様子で、釘づけにしない床板を一枚とりのけ、一ガロン入りの壺を取り出した。ポパイは両方の人差し指をチヨッキに突っ込み、煙草の煙の渦を顔から立ちのぼらせながら（彼は一度も手をふれずに煙草を根元まで吸っていた）、その男のやることを眺めていた。その表情は荒

荒しく、あるいは悪意に充ちていると言ってもいい。仕事の男が、壺を横腹の下に不器用におしかくしながら、一種油断のないおどした様子で台所の床をもときたほうへ戻っていくのを、ポパイは物思いに耽ってでもない、笑う機会を待ちかまえているような表情をしながら、部屋から出てしまつてしまつて、ポパイから目を離さなかった。再び、ヴェランダをゆく男の素足の音が聞こえた。

「大丈夫つてことよ」。ポパイは言った。「ルービー・ラマーが頓馬や薄馬鹿野郎のために料理をしてやつてるなんてこたあ、マニエル通りの連中には話しゃしねえよ」「このろくてなし」。女は言った。「このろくてなしめが」

二

女が浅い大皿に肉を盛って食堂に入ってきたとき、ポパイと、台所から壺を取り出してきた男と、見知らぬ男の三人は、荒削りの厚板三枚を二つのX字形の台に釘づけにして作った食卓にすでについていた。食卓の上にお

源氏はいつそう情熱をつのらせていく。

その夜も源氏は臙月夜の御帳台の中にし
のびこみ愛しあつていた。それをさどった
女房もいたが、太后や右大臣に告げ口して
も自分たちの落度になるだけなので、誰も
口をつぐんでいた。

突然にわか雨が恐しい勢いで降りつづ
け、雷も激しく鳴り轟いた夜明け方、右大
臣家では上を下への大騒ぎをして人々が右
往左往している上、女房たちが怖がつてみ
んな臙月夜の部屋に集つてきた。源氏は御
帳台の中に閉じこめられたまま、出るに出
られなくなつてしまつた。

夜も明けはなれた頃、雨も少しはおさ
まつた。そこへ右大臣があたふたと駆けつ
けてきた。太后の部屋を見舞つた後で、臙
月夜の部屋を訪れたのだが、にわか雨
の音にまぎれて、臙月夜は足音に気づかな
かつた。

右大臣はいきなり御簾を引きあげるな
り、

「いかがでしたか。何しろすさまじい昨
夜の天気、どうしていらっしゃるかとお

案じはしていたのですが、お見舞いにも伺
えなかつた。中将の君や宮の亮などは、お
側にいましたか」

という口調が、早口で落着きがない。源氏
は御帳台の中で、こんな密会のあわただし
さの中でも、右大臣と落着いた左大臣を比
較して、ひどいちがいがいと苦笑している。
部屋に入つてから喋ればいいのにと、作者
は非難している。

臙月夜はこの事態にほとほと困つて、そ
つと御帳台からにじり出て来た。その顔が
ひどく赫いのを見とがめ、右大臣は、

「どうしてお顔がいつもこのようでなく、
そんなに赫いのだらう。物の怪でもついて
いると厄介だから、修法を続けられるべき
でした」

と言いながら、ふと目をやると臙月夜の着
物の裾に薄二藍の男帯がまつわつて、御帳
台から引き出されている。怪しいと思つた
時、畳紙に何か書きつけたものが几帳の下
に落ちているのも見つけた。すつかり動
した右大臣は、

「これは誰のものですか。こちらへ渡し

なさい。調べてやろう」

と言つ。臙月夜もはつとふり返ると、源氏
の畳紙が目に入った。度を失つて茫然とし
ている。わが子ながら、さぞ恥しくて身
おき所もないように思っているだらうと察
して遠慮するのが身分柄当然なのに、右
大臣は前後の分別も忘れて畳紙をわし掴
みにすると、いきなり御帳台の中を覗い
た。

中では源氏が何とも言えず色っぽい様子
で、臙面もなく横になつてゐる。今更にな
つて源氏はそつと顔をかくして、何とかそ
の場をとりつくりうとしてゐる。右大臣は
いまいましくてやりきれないが、この場で
無礼な男が源氏の君だとあばき立てること
も出来ない。

証拠の畳紙を掴んだまま、寢殿の方へ引
きあげる。

右大臣は直情径行で、何でも胸に収めて
おけない性分である。この頃はそれに老い
のひがみが加わつてきたと、原文は、右大
臣の性格を分析している。

優美で婉曲なもの言いや態度が美とされ

着を着た猫背の男だ。靴ははいていず、二人がいま聞いたのは、この男のはだしの音だった。日に焼けた濃い髪の毛が、きたならしく、もつれあっている。あおじろい目は鋭く光り、短い、やわらかな顎ひげは、うすよくれた金色だ。

「あいつ、よっぽどの変わり者にちげえねえ、まったくの話しが」。男は言った。

「お前さん、なんの用だね?」。女は言った。仕事着の男は答えなかった。傍らを通りしなに、彼はポパイのほうに、ひそやかな、同時に抜けめない視線をちらと投げたがそれは、冗談を聞いたらすぐに笑い出しそうなのう機会を待ちかまえているといったふうだった。彼は足をひきずりひきずり、熊のような足どりで台所を横切ると、二人の姿がはっきり見えているところでありながら、なおも、抜けめない、陽気なうちにも人目を忍ぶような様子で、釘づけにしない床板を一枚とりのけ、一ガロン入りの壺を取り出した。ポパイは両方の人差し指をチヨッキに突っ込み、煙草の煙の渦を顔から立ちのぼらせながら（彼は一度も手をふれずに煙草を根元まで吸っていた）、その男のやることを眺めていた。その表情は荒

荒しく、あるいは悪意に充ちていると言ってもいい。仕事着の男が、壺を横腹の下に不器用におしかくしながら、一種油断のないおどした様子で台所の床をもときたほうへ戻っていくのを、ポパイは物思いに耽つてでもない、笑う機会を待ちかまえているような表情をしながら、部屋から出てしまつて、ポパイから目を離さなかった。再び、ヴェランダをゆく男の素足の音が聞こえた。

「大丈夫ってことよ」。ポパイは言った。「ルービー・ラマーが頓馬や薄馬鹿鹿野郎のために料理をやつてるなんてこたあ、マニユエル通りの連中には話しゃしねえよ」

「このろくでなし」。女は言った。「このろくでなしめが」

二

女が浅い大皿に肉を盛って食堂に入ってきたとき、ポパイと、台所から壺を取り出してきた男と、見知らぬ男の三人は、荒削りの厚板三枚を二つのX字形の台に釘づ

着を着た猫背の男だ。靴ははいていず、二人がいま聞いたのは、この男のはだしの音だった。日に焼けた濃い髪の毛が、きたならしく、もつれあっている。ああしろい目は鋭く光り、短い、やわらかな顎ひげは、うすよくれた金色だ。「あいつ、よっぽどの変わり者にちげえねえ、まったくの話しが」。男は言った。

「お前さん、なんの用だね?」。女は言った。仕事着の男は答えなかった。傍らを通りしなに、彼はポバイのほうに、ひそやかな同時に抜けめな視線をちらと投げたがそれは冗談を聞いたらすぐに笑い出し、そんな笑う機会を待ちかまえているといったふつだった。彼は足をひきずりひきずり、熊のような足どりで台所を横切ると、二人の姿がはつきり見えているところでありながら、なおも、抜けめない、陽気なうちにも人目を忍ぶような様子で、釘づけにしない床板を一枚とりのけ、一ガロン入りの壺を取り出した。ポバイは両方の人差し指をチョッキに突っ込み、煙草の煙の渦を顔から立ちのぼらせながら、彼は一度も手をふれずに煙草を根元まで吸っていた。その男のやることを眺めていた。その表情は荒唐しく、あるいは悪意に充ちていると言ってもいい。仕事着の男が、壺を横腹

の下に不器用におしかくしながら、一種油断のないおどおどした様子で台所の床をもときたほうへ戻っていくのを、ポバイは物思いに耽ってでもいるようにじっと眺めていた。男のほつでも、例の抜けめな、笑う機会を待ちかまえているような表情をしながら、部屋から出てしまつまで、ポバイから目を離さなかった。再び、ヴェランダをゆく男の素足の音が聞こえた。

「大丈夫つてことよ」。ポバイは言った。ルービー・ラマーが頓馬や薄馬鹿野郎のために料理をしてやつてるなんてこたあ、マニニエル通りの連中には話じゃしねえよ」「このろくでなし」。女は言った。「このろくでなしめが」

二

女が浅い大皿に肉を盛って食堂に入ってきたとき、ポバイと、台所から壺を取り出してきた男と、見知らぬ男の三人は、荒削りの厚板三枚を一つのX字形の台に釘づけにして作った食卓にすでについていた。食卓の上におかれたランプの光に照らし出された女の顔は、むつつりとはしていたが、年寄りの顔ではなく、目は冷たかった。ベンボーが見守っていると、女は一度も彼のほつを見よう

四分 三分 三分 四分
本文のslow yourself downに該当する
本文の slow yourself down に該当する

A peaceful country, Mauritania has no disputes or problems with any of its neighbors. It is contributing to the efforts to promote peace and mutually advantageous cooperation between countries in the world today. The basic objectives of Mauritania's foreign policies are pursued through membership in international organizations such

ベタ ベタ
本文のslow yourself downに該当する
本文のslow yourself downに該当する

at once は immediately 「ただちに」に置き換えることができます。裏から
いえば without delay 「遅れないで」ということです。right away は米語で at
once の意味で使用されます。これと紛らわしい right now は基本的に at this
very moment ちょうど今 の意味なので at once の意味で使うのは避けるべ
きです(熟語集には同じ意味として扱っているものがある)。I'm sorry I have
no time right now to talk with you. 「今あなたと話している時間が

みで示した the time when が省かれています。これもまた、前の例文と同じく関係副詞で先行詞がない場合の用法です。この他には、目的格

みで示した the time when が省かれています。これもまた、前の例文と同じく関係副詞で先行詞がない場合の用法です。この他には、目

みで示した the time when が省かれています。これもまた、前の例文と同じく関係副詞で先行詞がない場合の用法です。この他には、目

みで示した the time when が省かれています。これもまた、前の例文と同じく関係副詞で先行詞がない場合の用法です。この他には、目

ではデータ構造の記述が難しく、したがって業務システム
の構築には不向きである。また、文書データの再利用
(別の目的への利用)も困難である。これがHTMLの
弱点といえる。この弱点を克服するには、意味のある、
つまり、内容をそのまま示すタグ付けを可能とする
仕組みが必要である。

ではデータ構造の記述が難しく、したがって業務システム
の構築には不向きである。また、文書データの再利用
(別の目的への利用)も困難である。これがHTMLの弱点
といえる。この弱点を克服するには、意味のある、
つまり、内容をそのまま示すタグ付けを可能とする
仕組みが必要である。

まった。体がこわばって動けなくなった。と、フレデリックが、視線の定まらないうつろな目つきで、ぐっ、ぐっ、とひっぱられるようにみぞをのぼりはじめた。「行かなくちゃいけない。」「ピリーは、その声をきいても頭がぼんやりしてしまっていた。昨夜と同じように、また

まった。体がこわばって動けなくなった。と、フレデリックが、視線の定まらないうつろな目つきで、ぐっ、ぐっ、とひっぱられるようにみぞをのぼりはじめた。「行かなくちゃいけない。」「ピリーは、その声をきいても頭がぼんやりしてしまっていた。昨夜と同じように、また

文でも、回避がまったくできないわけではありません。たとえば段落の最後の行が、句点やピリオドを除いて一文字だけになってしまつという事態は、組版の処理で避けられます。従来、このような調整はあまり行われてきていません。しかし、欧文組版で段落の最後の行が短い一単語のみになっては不体裁であるのと同じように、和文でも最後の一行が一文字だけになってしまつことは不体裁です。

文でも、回避がまったくできないわけではありません。たとえば段落の最後の行が、句点やピリオドを除いて一文字だけになってしまつという事態は、組版の処理で避けられません。従来、このような調整はあまり行われてきていません。しかし、欧文組版で段落の最後の行が短い一単語のみになっては不体裁であるのと同じように、和文でも最後の一行が一文字だけになってしまつことは不体裁です。

ある大きな森のそばに、ひとりの貧しいきこりが住んでいました。きこりには、なにも食べるものがありませんでした。おかみさんとヘンゼルとグレーテルというふたりの子どものための、その日その日のパンさえろくにありませんでした。夜、心配のあまり寝床でごろごろ寝返りをうっていると、おかみさんが言いました、「ねえ、おまえさん。明日早くふたりの子どもを連れておいき。それぞれにあと一切れずつパンをやって、森へ連れ出すのさ、木が一番生い茂った森の真ん中へね。そして、火を起こしてやったら、そこを離れてふたりを置いてきぼりにすればいいよ。もうこれ以上ふたりを養ってやれやしないもの」「何を言うんだい、おまえ」、きこりが言いました、「自分のかわいい子どもを、森のけだもののところへ連れていくなんて、そんなことできやしないよ。すぐに子どもたちを八つ裂きにしまおうよ」「おまえさんがそうしないんなら、わたしたちはみんないっしょに飢え死にするしかないよ」、おかみさんがきこりをうるさくせめたので、ついにきこりも承知しました。

ふたりの子どもたちもお腹がすいてまだ眠れずにいたので、かあさんがとうさんに言ったことをみんな聞いていました。グレーテルは、もうおしまいだと思って、悲しそうに泣きだしました。けれどもヘンゼルが言いました、「静かに、グレーテル。めそめそするのはおよし。ぼくがなんとかするから」。そう言うと、ヘンゼルは起き上がり、上着を着て、くぐり戸を開け、こっそりと外へ出ました。外は月が明るく照り、白い小石がまるで銀貨のように輝いていました。ヘンゼルはかがんで、上着のポケットに入るだけの小石をつめ込むと、家へ戻りました。「元気をお出し、グレーテル。そしてゆっくりお休み」。それからヘンゼルは、またベッドに入って眠りました。

朝早く、まだ日も昇らぬうちに、かあさんがやってきてふたりを起こしました。「さあ、ふたりとも起きるんだ。森へ行くんだよ。パンを一切れずつあげるからね。だけど、ちゃんと考えて、食べないでお昼に取っておくんだよ」。ヘンゼルのポケットには小石がいっぱい入ってい

ある大きな森のそばに、ひとりの貧しいきこりが住んでいました。きこりには、なにも食べるものがありませんでした。おかみさんとヘンゼルとグレーテルというふたりの子どものための、その日その日のパンさえろくにありませんでした。夜、心配のあまり寝床でごろごろ寝返りをうっていると、おかみさんが言いました、「ねえ、おまえさん。明日早くふたりの子どもを連れておいき。それぞれにあと一切れずつパンをやって、森へ連れ出すのさ、木が一番生い茂った森の真ん中へね。そして、火を起こしてやったら、そこを離れてふたりを置いてきぼりにすればいいよ。もうこれ以上ふたりを養ってやれやしないもの」「何を言うんだい、おまえ」。きこりが言いました、「自分のかわいい子どもを、森のけだもののところへ連れていくなんて、そんなことできやしないよ。すぐに子どもたちを八つ裂きにしまおうよ」「おまえさんがそうしないんなら、わたしたちはみんないっしょに飢え死にするしかないよ」。おかみさんがきこりをうるさくせめたので、ついにきこりも承知しました。

ふたりの子どもたちもお腹がすいてまだ眠れずにいたので、かあさんがとうさんに言ったことをみんな聞いていました。グレーテルは、もうおしまいだと思って、悲しそうに泣きだしました。けれどもヘンゼルが言いました、「静かに、グレーテル。めそめそするのはおよし。ぼくがなんとかするから」。そう言うと、ヘンゼルは起き上がり、上着を着て、くぐり戸を開け、こっそりと外へ出ました。外は月が明るく照り、白い小石がまるで銀貨のように輝いていました。ヘンゼルはかがんで、上着のポケットに入るだけの小石をつめ込むと、家へ戻りました。「元気をお出し、グレーテル。そしてゆっくりお休み」。それからヘンゼルは、またベッドに入って眠りました。

朝早く、まだ日も昇らぬうちに、かあさんがやってきてふたりを起こしました。「さあ、ふたりとも起きるんだ。森へ行くんだよ。パンを一切れずつあげるからね。だけど、ちゃんと考えて、食べないでお昼に取っておくんだよ」。ヘンゼルのポケットには小石がいっぱい入ってい